0.1 2001 基礎

$$\boxed{1} (1) \left\{ v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 0 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix} \right\}$$
が基底.

$$(2)f(v_1) = \begin{pmatrix} -1\\0\\1 \end{pmatrix} = -v_2, f(v_2) = \begin{pmatrix} 0\\-1\\1 \end{pmatrix} = v_1 - v_2$$
 である.

よって
$$T = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -1 & -1 \end{pmatrix}$$
 が表現行列.

$$\boxed{2} \ (1) \begin{pmatrix} 1 & 1 & a^2 \\ 1 & a & 1 \\ 1 & 1 & 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 0 & a^2 - 1 \\ 0 & a - 1 & 0 \\ 1 & 1 & 1 \end{pmatrix} \ \, \sharp \ \, 0 \ \, a \neq \pm 1 \ \, \Im \ \, \dim V = 3 \ \, a = -1 \ \, \Im \ \, \dim V = 2 \ \, a = 1 \ \, \Im \ \, \Pi \ \, \Pi$$

 $\dim V = 1 \text{ }$

 $(2)\varphi\colon V+W\to V/(V\cap W); v+w\mapsto [v]$ で定める. v+w=v'+w' なら $w-w'=v'-v\in V\cap W$ である から [v]=[v+w-w']=[v'] より well-defined である. φ は全射準同型であり, $w\in W\subset\ker\varphi$ は明らか. $\varphi(v+w)=0$ なら $v\in V\cap W$ より $v+w\in W$ である.

よって $(V+W)/W\cong V/(V\cap W)$ であるから $\dim(V+W)-\dim W=\dim V-\dim(V\cap W)$ である. よって

 $\{v_1,w_1,w_2\}$ は一次独立. よって $\dim V+W=3$ である. よって $\dim V+\dim W-\dim (V+W)=\dim V-1=1$ より a = -1.

 $3 (1)-2 < a_n < 2$ のとき、 $0 < a_{n+1} = \sqrt{a_n+2} < 2$ である。また 0 < x < 2 なら (x-2)(x+1) < 0 より $x^2 < x+2$. すなわち $x < \sqrt{x+2}$ である. したがって -2 < x < 2 で $x < \sqrt{x+2}$ が成り立つのは明らか. よって $-2 < a_1 < 2$ のとき $a_1 < a_2 < \cdots < 2$ となるから広義単調増加.

 $a_1 = 2$ なら $a_2 = 2, \dots, a_n = 2$ より広義単調数列.

 $a_n > 2$ なら $a_{n+1} = \sqrt{a_n + 2} > 2$ である. x > 2 なら (x - 2)(x + 1) > 0 より $x > \sqrt{x + 2}$ である. よって $a_1 > 2$ のとき、 $a_1 > a_2 > \cdots > 2$ となるから広義単調減少.

(2) 全ての場合において $\{a_n\}$ は有界単調数列であるから収束する. したがってその収束値を α とおけば $\alpha = \sqrt{\alpha + 2}$ であるから $\alpha = 2$ である.

 $\boxed{4} \ R_1, R_2 > 1 \ \text{と \mathfrak{F} \mathfrak{F}}. \ \left| \int_{-R_1}^{R_2} \frac{e^{ix}}{x^2+1} dx \right| \leq \int_{-R_1}^{R_2} \left| \frac{1}{x^2+1} \right| dx \\ \leq \int_{-R_1}^{-1} \frac{1}{x^2} dx + \int_{-1}^{1} dx + \int_{1}^{R_2} \frac{1}{x^2} dx \\ = \left[\frac{-1}{x} \right]_{-R_1}^{-1} + 2 + \frac{1}{x^2} \left(\frac{1}{x^2+1} \right) \left(\frac{1}{x^2+1} \right)$ $\left[\frac{-1}{x}\right]_{1}^{R_{2}}=4-\frac{1}{R_{1}}-\frac{1}{R_{2}} o 4$ $(R_{1},R_{2}\to\infty)$ である. よって広義積分は収束する.

R>10 とする. \mathbb{C} 上の積分経路 D_R を $C_R=\left\{Re^{i\theta} \mid \theta\in[0,\pi]\right\}$ と $[-R,R]\subset\mathbb{R}$ の和集合とし,反時計回りの向きをとる. $\left|\int_{C_R} \frac{e^{iz}}{z^2+1} dz\right| = \int_0^\pi \left|\frac{\exp\left(iRe^{i\theta}\right)}{R^2e^{2i\theta}+1} Re^{i\theta}i\right| d\theta \leq \int_0^\pi \frac{R\exp\left(-R\sin\theta\right)}{R^2-1} d\theta \leq \frac{\pi}{R} \to 0 \quad (R\to\infty)$ である.

また $\int_{D_R} \frac{e^{iz}}{z^2+1} dz$ は被積分関数の特異点は $\pm i$ であり,積分領域内では i が唯一の特異点である.留数をもとめると $\operatorname{Res}\left(\frac{e^{iz}}{z^2+1},i\right) = \frac{e^{ii}}{i+i} = \frac{e^{-1}}{2i}$ である.したがって留数定理から $\int_{D_R} \frac{e^{iz}}{z^2+1} dz = \frac{\pi}{e}$ である. 以上より $\frac{\pi}{e} = \lim_{R \to \infty} \int_{D_R} \frac{e^{iz}}{z^2+1} dz = \lim_{R \to \infty} (\int_{C_R} \frac{e^{iz}}{z^2+1} dz + \int_{-R}^R \frac{e^{ix}}{x^2+1} dx) = \int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{ix}}{x^2+1} dx$ である.

以上より
$$\frac{\pi}{e} = \lim_{R \to \infty} \int_{D_R} \frac{e^{iz}}{z^2 + 1} dz = \lim_{R \to \infty} (\int_{C_R} \frac{e^{iz}}{z^2 + 1} dz + \int_{-R}^R \frac{e^{ix}}{x^2 + 1} dx) = \int_{-\infty}^\infty \frac{e^{ix}}{x^2 + 1} dx$$
 である